

伊平屋島採訪記(その2)

上江洲 均*

島尻の年中行事

<12月>

二十四日 赤ウブク(赤飯)を台所の火の神に3個、床へ2個供える。仮壇へは酒と肴を供える。餅も供える。火の神へ三つ重ねた三皿である。床は火の神からお下げして供える。仮壇へは餅は供えない。

この日は一年中の体の願いである。火の神の昇天する日で、この一年の無事を感謝し、線香を7回ともす。火の神は7回ともす間に昇天するといわれる。火の神は三人で、皆いっしょに昇天する。火の神の降りて来るのは元旦である。

ワーカルシー 12月28日は、昔から豚を屠殺した。一軒で一頭の家もあるが、数名で組をつくってやる家もある。豚を殺して腑分けなどするのは、前の浜辺でやる。この日は皆いっしょの日なので、大へんにぎやかである。

トウシヌユルー 大晦日は、火の神や床へは供え物をせず、仮壇に供え物をする。一つの膳におつゆとご飯、肴、おかずをのせたもので、四つぐみである。

ウサカナワーチ
(豆腐、魚など)
赤御飯

○ ○
○ ○
○

おかず
お汁(たまご、ソース)
ソース

仮壇へ供えてのち、次のような唱え言をする。
クーヤ トウシヌユルー ヤイビークトゥ、ウシワーチン ウ酒ン
ウサギテーピクトゥ、ウキトウイ シンヘーリ
(今日は年の夜で、肴も酒もお供えしてございますから、受け取って下さい)

図1 仮壇への供物

しばらくして仏壇の酒とウサカナワーチ(肴鉢)を下ろし、家族間のさかずきを交わした。当主から左手の人へというように右まわりで回わしていく。

<年占>

1. イヌ、イ、ネの方が暗いとき、その方向から風が吹くときは、新年はよい年になる。
2. ウシ、トラからタツ、ミの方向へ風が吹くと、新年は夏に台風がくる。

* 県による年占はない。

<1月>

元旦 未明にウィースカーという井戸から若水を汲む。テー(松明)をともし、必ず男が行く。男がやった方が徳が入るという。若水汲みに行った者が帰るところ、家の戸口にはウシムン(吸物)を準備しておき、その人に食べさせる。さらに水を汲んで来た人は、門松を取りに行く。

* (うえすひとし 沖縄県立博物館学芸員)

床に飾る松は、芯を含めず、5本、7本、9本の奇数の枝を出したものでなければよくない。門へは石垣とほぼ同じ高さのものを立てる。竹もかざる。ンジャ竹でもカラ竹でもよい。火の神へも松を飾る。

掃除をし、汲んで来た水を分けて湯を立て体を清める。あの水ではお茶を沸かし、仏壇その他へお茶とうをあげる。

年頭のあいさつは、若水湯に浴びたことを言う。「若水に浴みてイ、若くないみそち」。すなわち若くなりましたか、というあいさつである。

火の神に、膳に盛った花米、ウグシ（酒）、ウブク（赤飯）三個を供え、松のトゥブシをもやし、それから線香の火をつける。火の神へは、「七夜のつとめ、済ましみそーち」とあいさつを述べる。

その後、床へも膳と酒を供える。ウブク（赤飯）二個、花米、ウグシを火の神からおろして床へ供える。膳の供物をシムイという。

大根にタマキを立てる	ナントー	仏壇へは、ウシワーチ（大鉢）一つ、吸物一対、酒を供える。
	魚（海のもの）	間もなくシムイをお下げし、主人が盃を持って、家族の者へまわす。
豆腐（対角線に切って）	肉イリチー	サカズキとシムイを持って子供へ渡すと、子供はその返礼に同じものを返すというように、右まわりで次々と回わす。
		年頭は、隣近所をウシーマートウ（全般に）拝んでまわる。以前は線香を持って拝んで回ったが、3、4年前から持たないようになった。

図2 床に供えるシムイ
この日から12日までに初十二支に当った家族の祝いをする。それをハチトシビーという。仏壇にウサカナワー（肴鉢）、酒、お茶を供えた家族だけの簡単なものである。

ハチバル 初原は、新しい年になって、最初の農仕事をすることである。各自で自分の畑を回るだけである。朝はお宮へ10セントを出し、部落の全戸が参拝する。最近は有志だけがやっている。

ハチウクシー（初起し）は、大工や舟を持っている人たちがやることで、全戸には関係ない。

ミッチャヌシク 三日節供である。朝仏だんへお汁にご飯、おかずを備えた膳を一対お供えする。

ナンカヌスク 朝、豚骨を入れたドゥーシー（雑炊）をつくり、それを二お膳仏壇にお供えする。

ジュールクニチー 十六日、墓掃除をし、墓前で線香をともして、仏を家へ案内かける。家では四ツ組膳を供え、ごちそうを詰めた重箱二対、ウチカビ（紙銭）もお供えする。新仏を出した家、すなわちミーサの家では、トゥール（燈籠）を作りて墓に供え、皆で墓参する。トゥールは14日から準備して下げておき、16日に焼く。

ハチカソーグッチ 二十日正月。この行事は以前はなかった。土地の金持ちさえしなかった。これをやるのは、特定の家だけであった。

<2月>

二月ウマチー 十五日。お宮へ神人たちが出て、米のジンシュを供える。各家庭では、仏壇にお茶を供えるだけである。

彼岸 重箱に餅を詰め、ウシワーチ（肴鉢）にご飯等を加えて仏壇に供える。ウチカビ（紙銭）をたく。

<3月>

三月三日 フーチムーチ（よもぎ餅）をつくり、全女性が浜へ下りてあそんだ。浜へ下りないとアカマタングワ（蛇の子）を産むといわれた。

ウマチー 十五日の麦の行事。麦でつくった神酒（ウンサクという。ジンシュとは別）をお宮に供える。各家庭では、仏壇にお茶とご飯、お汁を供える。

シーミー 墓参をする。昔からやっていた。墓前でウチカビを焼いた。現在は、墓掃除をし、ウチカビは家で焼いている。（清明祭）

墓は一家で一基持つのをたてまえとするが、一般にはタクィー（2軒）、ミクィー（3軒）で共同の墓を使っている家も多い。

<4月>

初ムッタガイ 4月1日。あそびである。仏壇へお茶とうをあげる。晩は四つ組みの膳を仏壇へ供える。この日、冬着から夏のバサジン（芭蕉衣）への衣替えをした。

アブシバレー 29日。朝仏壇へお茶とうをあげ、晩ウシワーチとご飯をお供えする。この日は部落中の人が大通りへ出、競馬を見物した。この日、昼中は仕事をし、夕方競馬などをしてあそんだ。30日は1日中遊びで、海へ出て漁などした。

<5月>

ヤマンチミー 1日。門などにトベラ木を立て、2日間あそんだ。昼はハーリーをし、晩は踊りなどをしたが、今はしない。5月4日の「ユッカヌフィー」には何もしない。

<五月五日> 麦、豆などを煮て作ったアマガシを供える。これは朝の行事である。ショウブは飾らない。

ウマチー 15日。ご飯を昼夜2回仏壇へ供えた。魚は料理の中に必ず加える。この日魚を食べないと、年中食べそこねるといわれた。田から稲穂をとって来て供えた。お宮へは、麦でつくるウンサクを供えた。各家庭でウンサクは供えない。神おがみは昔はあったが、現在はすたれている。

昔はこの頃まで米を残すことはめったにできず、よほどの家でなければ残さなかった。

<6月>

六月ウマチー 15日。昼各家庭で米神酒のジンシュを作り、神仏に供えた。仏壇へは夕ご飯も供える。米はこの日に供えるのをすまない間は、人にみやげにもやってはいけないとされた。そのほかに6月には次のような行事があった。

「チカドイ」………仏壇にご飯を供えるだけ。

「ナークチ」………ムッチー（丸餅）を供える。

「ワーフルマイ」………仕事を仕み、あそびである。「ンムヌカミ」へおにぎりを供える。（神人だけ）

「クージ、ウイミ」………（公事折目）25日にやった。ふつうのご飯（強飯でない）を作り、供える。我喜屋では綱引があったが、この島尻にはない。

<7月>

タナバタ（七夕） 7日。特に墓掃除をすることはない。朝お茶を仏壇へ供え、昼ウシワーチ（肴鉢）を供えて、皆で拝む。

ウンケー 13日。夕方門で線香を立て、ご先祖を案内する。酒を供えることはない。火を門にともすことはしない。

供え物としては、アラン（あだん）、ウージ（さとうきび）。特にグーサンウージといって、杖になるような長いキビ）、クニフ（みかん）、山ぶどう、などである。ミンヌクー（水の子）は野菜の切れ端などでつくり、仏壇の一番下に供える。他にトージミ（きみ）にさとうきびの切れ端を加えたものを15日まで飾るが、現在はトージミがないので、粉を入れる。

14日 13日や15日に比較して、中休みのような日である。仏壇への供え物は日に3回やる。朝はお茶にドゥーシー（ヒンナーという野菜を入れた雑炊）を供える。昼はお茶とサトーダーグ（砂糖だんご）を供える。晩はお茶にご飯である。

ウーフイ（お送り） 15日。朝はお茶にご飯。昼も適当なものを供える。晩は雑炊でもお粥でも供える。晩は、門中の家を何軒も拝んでまわる。紙アブイ（紙戻＝ウチカビをたく）するのは特定の家ののみに行われていた。

夜中に位牌以外の供物・仏具はヤンマー（ヒンブン垣の内側）の庭へすべて移し、そこでお送りする。供え物のアダンは浜へ持って行ってする。また香炉に線香をともしたまま浜へ持って行く。グーシにアダンをのせたたガシナをかけて浜へ持って行く。浜では、香炉の灰をすて、西方の墓（フニシン）へ向いて線香を立て、新しい砂ととりかえる。今日詰める砂は、来年までそのままにし、この15日のウーケイの日は浜でとりかえることになる。持ち帰った香炉は、仏壇へ返す。

ウンジャミ 16日。女の子たちが行う行事である。7才、9才、11才の女の子たちが白サージで鉢巻きし、我喜屋へ行った。ヌルは我喜屋にて、そのヌルを案内する必要があるからである。ヌルはまず我喜屋の拝所を拝んでのち、島尻へ来た。我喜屋のウェーヌサーという神人が前サライ（先導）としてヌルを案内して来た。一行はトゥヌチと三つの根屋をめぐった。前サライのウェーヌサーは道々弓を引く真似をしながら行列した。

その後で「ナリクゥヤー」という行事がある。7、9、11才の女の子たちが、ウェーク（權。ただし模型）を持って各戸めぐりをする。權で戸をたたくと、閉め切った戸のすき間からモチを一つ渡す。モチを受け取った一行は、次の家へ移る。

全戸めぐり終ると、現在の公民館前の浜で円陣をつくって、舟こぎの真似をする。片方が「ウモーカー」というともう一方が「トーリカ」ーと唱える。すなわち「おも舵」、「取舵」の意である。そうしながら舟漕ぎの真似をするのである。最後で周囲にいる人たちが「具志川（島）かい（へ）、流りたんどう」と言った。

シヌグ 17日。昔はウンジャミは日が決っていたが、シヌグは決っていなかった。2日後のことであった。シヌグ・ウンジャミは足音を立ててもいけないといわれるほど、静かにしなければならなかった。もし違反すればハブが出るといわれた。

7才、9才、11才の男の子たちが白衣に白鉢巻姿でトゥヌチへ集まり、それから三ヶ所の根屋（ソーグシク、マエダソントー、メーヤーの順で）へ行く。その後各戸めぐりする。各戸では玄関から入り、台所を駆けぬけて外へ出る。

村中すむと 7, 9, 11才の子供たちは、部落後方、シヌグモーの手前にあるカミシー石という石を棒で打ち、その棒を飛び越え、それから北の海岸へ出る。セーガタ（ばった）をそのシヌグジーという石の下に埋めて帰ってくる。一団が「オーナザレーガ」と唱えると他の一団が「ヒーリハーウィ」と唱える。

根屋の 3 人の根人も北の海岸へ行く。白衣裳で馬に乗る時、神石をたたく。そのとき「ウーティクーワ、ワッチウーヤ」という。（語義不明。）

村の男子は全員シヌグモーへ集まる。そこへ北の海岸からオーナザレーの一団（7才、9才、11才の男子）が帰ってご馳走をもらう。そこでは、夜中までシマ（すもう）などをした。初シヌグを迎えた子の家では祝いがあった。男子のばあいは、5人か7人の連人衆を頼んで肴鉢を持ってシヌグモーへ行った。そこには屋号ソーグシク、メーヤー、メーラ村頭という家の根人（当主）すなわち、ユンヌヌサー、メイー、メーラヌサーがいて、子供を抱き、福をさずけてくれる。家から子供を抱いて行く人は、相を当て、もし母親が合わない場合は他の人に頼む。連人衆は男である。村の男は全員シヌグモーへ行き、女はトヌチへ行った。女児の場合は、トヌチにいる三人の神女（ムッチャー、アキソ、ユムイ）に抱かせ、健康の祈願をした。

この日、子供のできない若夫婦を竹竿でつくった馬に乗せる。馬のつくり方は、1尋ばかりの竹の棒両端に縄をかけ、竹をまたがせ、縄を肩にかけたものである。馬に乗せた男女を子どもたちが「ドー、ドー、ドー」と囁しながら、シヌグモーとトヌチと自宅の間を引き廻わすのであった。これを「ファー・フィン」（子を乞う）といった。このようにして生まれた子をフイングワ（乞い子）といった。

この日の儀式歌は、前号にも紹介したが、「ジトレ（地頭代）スルメ（主の前）たり、御取持ち上げら あまん世のシヌグ、ゆるちたぱり」であった。

すべての行事がすんだ夜中、二組に分かれて「オーナザレーガ」「ヒーリハーウィ」と唱えながら家路につく。

<8月>

ヨーカピー 8日から10日まで。お茶と肴を仏壇に供える。9日までは物音が聞こえる。この日は、セーマ（ティンゲー）が歩くと言われた。木の梢に登ると落とされると言われた。それで屋根に登って物音を聞いた。時には火が上ることもあった。火の玉（チュダマ）が低い所を飛ぶときはチュダマの主（重病人）は治るが、石垣の高さを飛ぶときは、治らないと言われた。

ウイミ（折目） 9日。仏壇にご飯を供える。ご飯とは、トーヌチン（唐黍）、マージン（真黍）、粟を混ぜたもの。いわゆる米を使わないご飯で、「ウフジャガシチー」という。これは米だけの「チュラガシチー」に対している。

チュラガシチー 10日。米だけのカシチー（強飯）をいう。ススキ 1 本と桑の小枝で「ゲーヌ」というのをつくり、仏だんに供える。床、押入、米俵にも各 1 本ずつつける。門のヒンブン垣の両端、フル（豚小屋）の入口に 2 本。本宅の隅にも 2 本。水甕の首にもつける。屋敷内の大木にもつける。

そのゲーヌからススキの葉を取り、「シーワーをかえす」といって、耳に挟み、女は髪にさして

厄払いする（夕方）。シーワーをかえせば丈夫になる。

この日から次の十二支の生れ年の人の「イリヤク」（入厄）になるといわれた。

テルコゴーミ 11日。作物の願いである。夜は神人や村役人がトヌチやニーヤへ集まるが、昔は村中の人が集まり各戸をめぐった。東ハリと西ハリに部落を分け、歌を歌いながら戸主たちが各戸をめぐった。それから、女のウスデークに似て、太鼓を打ちながらの円陣踊りがあった。

儀式には次の歌を歌った。

(入羽) 首里天加那志百十までちょわれ うまんちゅのまじり うがりしりら

(出羽) 八月の月やいりき月やしが あんさりんあそで わにん遊ば

この中間ではワラ鉢巻をした人たちがガーエーをした。ニートゥイという役の者が、家の中でテルコグチを唱えた。この東西に分けての各戸めぐりは、翌朝までかかったので、後には各班に分けてやった。

トヌチのウグワン 12日。朝からやる。まずトヌチで棒で演武し、それから道ズネイし、女たちのウスデークがあり、その後舞台での演芸がある。初めに「かぎやで風」の曲でカリー（縁起）をつける。

首里天加那志 百十までちょわれ

御万人のまじり 拝でしりら

みるく世のしるし 十日越しの夜雨

向かてちゅる年や みるく世界報

この歌に合わせて扇舞いした。その他上り口説、万才などが出た。道ズネイの歌は次のような歌であった。（「稻摺り節」から）

今年む作りや あん美らさゆかて

倉に積み余まち 真積さびら

ウグワン 13日の晩の行事。現公民館前の道が昔のウマウィーである。そこで道ズネイをし、棒術、ウスデークの披露などがあった。そこには舞台もつくり、舞台での演芸もあった。村から料理（ウシワーチ）をつくり、そこから北へ向って拝む。

十五夜 15日。行事は正午から始まる。夜は月に向って拝みをした。フチヤギ餅、ウシワーチ（肴鉢）をお供えし、アランチュミといって、茶わん2杯のミハナ（花米）も供える。茶碗に塩を盛って、それを香炉と見て線香を立てて拝んだ。

この夜屋敷のウガン（祈願）をした。この十五夜に上げると来年の十五夜にまたウガンすればよい。今は東南の隅を拝むが、昔は屋敷の四隅を拝んでいた。四ヶ所に線香を立て、一ヶ所に集まって下さいと拝み、東南の隅にまとめていた。供物はムッチ（餅）2重ねと肴2皿で、ほかに錢も供え、灯明をつけた。そのときの唱え言葉は、次のようなものだった。

屋敷の神や 屋敷に居着みそうり

中リ一の神や 中リ一に居着ちみそうり

カニゾーの神や 金門に居着ちみそうり

三所御肝 御中てい一 ないみそうり

①りん人・②りん人の 授かとる ウスの屋敷んかいや
何ん悪風や着きらんごと、ヤナムン・チリムンや 押払て 外んかいどきなしみそうり

ウマイで、棒・ウスデークをする。13日と同じ出し物であるが、13日は簡単で、十五夜が本番であった。十五夜はしかも組踊りも出た。組踊りは「伏山」、「村原」、「中城若松」が演じられた。各部落とも得意があって、田名では「高平万才」「護佐丸」、我喜屋では「久志の若按司」であった。

昔は8月15日に我喜屋で、野甫も加えて「四ヶイチャイ」といって、合同の演芸会を催した。出し物が多くて、朝から演じなければ終れなかった。

<9月>

タングワナニチ

九月九日 9日。菊酒を供える。ウシワーチ(肴鉢)も供える。火の神、床、仏壇の順で拝む。ミハナウグシ(花米と酒)も供える。

ナーラニ 15日。各家庭では、こうじをたてて、ミシャフをつくった。各戸とも餅もつくり、火の神と床に供えた。ミシャフは、火の神・床・仏壇に供えた。さらに火の神と床には、九合ミハナを供えた。

この日は作り物の願いをする日である。

神酒の種類には三つあった。「ジンシュ」は米で作る。米を水にひたし、それを若い女たちが口でかんだものである。「ミシャフ」は米こうじ(ホージという)をたて、翌日それにごはんを炊き入れてつくる。米こうじでも、餅のこうじでもよい。「ウンサク」は麦を炒って粉にしたいわゆるユースク状のものに水加減を多くしたものである。

年中の行事で丸い餅をつくるのは、12月24日とこのナーラニの日だけである。この日、火の神と床には花米を供え、一年中のシュビといって、それぞれ線香を一ひら(六本を意味する黒線香一本)を立てる。火の神にはもう一ひら立てる。この方は来年の願いである。これをタチーフトゥチという。

<10月>

タントウイ(種子取) 立冬の入日。霜降の節にやることもあった。火の神と床を拝んでから種子まきに行った。タントウイ・デームンといって、カーサにモチ飯を包み、苗を播いた人に食べさせる。その時の箸はニーメーシといって、竹の根でつくった箸であった。デームンは火の神にだけ供え、仏壇へはふつうのご飯を供えた。

<11月>

ソイ 1日。仕事を休んであそんだ。朝火の神と床を拝み、タチーフトゥチといって、9月のタントウイと同じことをやった。この日は「火のお願」もやった。米の粉を水で混せて握ったものと水とを火の神前に供えた。これを炊事をする意味で、「ジョウシチのお願」といった。水と酒と火をつけないヒジュルお香である。火の神前だけに供える米を搗いたものを米ヒツジ(しとぎ)といった。

<12月>

ウヤタイ・ムーチー 8日。この日餅をつくる。月桃に包んだものである。その餅を子供たちの数だけ紐で結んで下げる。食べた餅の包みで十文字に結んで、家の入口に吊っておいた。これをユーチマター（四ツ股）といった。餅の煮汁は門外でこぼす。ウシームン（吸物），肴，ムーチーを仏壇に供える。火の神の前には何も供えない。

1971年 伝承者 仲川 蒲（80歳）さん

田名のウンジャミ

伊平屋，伊是名では，旧盆行事の後に「ウンジャミ」と「シヌグ」の行事が行われる。とりわけ，伊平屋村田名のウンジャミは，現在も行われており，よく知られてもいる。シヌグ行事は，男子が主役であり，男の子たちが各戸めぐりをし，浜で害虫を流したり，杖で道行く人や家畜を叩いたり，子宝の祈願をしたりする。これに対しウンジャミは女子が中心になる。各戸を訪問して餅をもらい，模擬的な舟漕ぎの儀式があり，島の東海岸へ乗馬の行列をし，神送りで終了する。

ここにあげる写真は，1971年9月6日（旧暦7月17日）に撮影した「ウンジャミ」行事である。この行事においては，ノロよりもユムイ神，イシドゥ神，ウーシドゥ神，ユートゥイ神の4神女が主体になる。

以前はこの4名が，東西二手に分かれて前日（16日）の夜，各家庭をめぐり歩いた。オ一（芦の葉，本来はススキだという）を与える。その返礼にサンニンの葉に包んだムーチーをもらう。オ一は家屋を払い，台所の火の神の後に差しておいた。

17日は朝部落後方の田名屋へ集まる。ここは『琉球国由来記』に出る「田名ノヲヒヤ」の火神をまつる家である。ここで行事の世話をするのが「田名ヲヒヤ」すなわち現在呼ばれる田名サー（または田名ヘーカー）である。

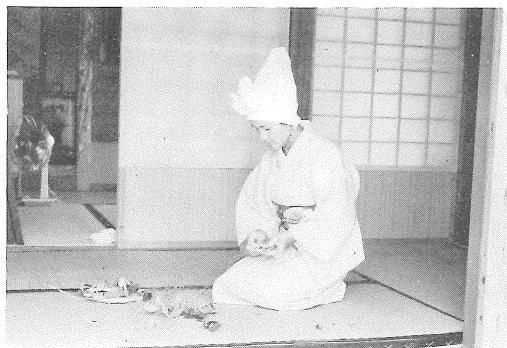
田名屋の前左側の庭でウーシドゥ神など海の神4名が東向きに並び，ウムイをうたい，神酒をいただき，前方に設けた舟型の中へ立つ。これは，舟出の形容であるという。残りの神女たちはその周囲をかこんで立つ。この儀式がすむと，部落の中を通り，東はずれのハナシチのハンタという所に整列する。ここでもウムイをうたい，手をかざして別れの仕草をする。

その下の道のあたりで，神女は乗馬し，東海岸の港口（ナートンチビ）へ行く。神女は20名で，馬は各系統から出し，男たちが手綱を握る。浜へ着くと，そこで下馬し，港口にある拝所の前の岩へ上る。そこで神女たちは，持って来たオ一の葉を投げつけ，ウムイを歌い神送りをする。最後に「唐船ドーイ」の歌をテンボも軽やかに歌い，神送り行事を終了する。

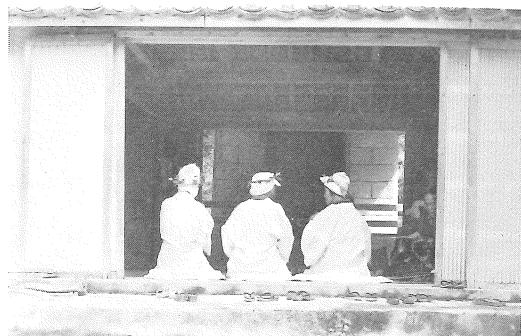
神女たちは各系統の宗家で下馬し，そこへ氏子たちが集まって神女から盃の酒をもらい，宴をする。そこで「テルコグチ」が歌われ，昼の行事（前半）は終了する。

午後の行事は，再び田名屋へ神女が集まり，男神人（田名サー）によるテルコグチがあり，酒宴となり，全日程を終了する。この行事全体を「ウンジャミ」といい，馬行列だけを「ヌインジチ」と言っている。これは「乗り続き」または「乗連」の意だろうと言われている。

島の古老の言い伝えでは，昔遭難したチチャ（喜界島）のノロを救助し，送り返すことに由来する行事であるという。しかし，神送りの行事は各地にあることだし，それらとの比較で考える必要がある。



① ガジマルの葉でカブイをつくる
ウーシドゥ神



② 田名屋へ集った神女たち



③ 田名屋の前庭に布を張って舟型を
つくる（田名サーがやる）



④ ユヌシのウンサク（神酒）を神
にささげる



⑤ ユヌシの神酒を4名の海神がい
ただく



⑥ ウムイをうたい、神を送る別れ
の仕ぐさをする



⑦ ウーシドゥ神、ユムイ神、イシドゥ神、ユートゥイ神の4神女が舟型に入り、舟こぎの仕ぐさをする



⑧ 部落の東はずれの「ハナシチのハンタ」でウムイをうたう



⑨ ウムイをうたい、別れをする



⑩ 部落のはずれで、神女は馬に乗る



⑪ 馬に乗り、一族の男たちが手綱を取って、東海岸へ向う



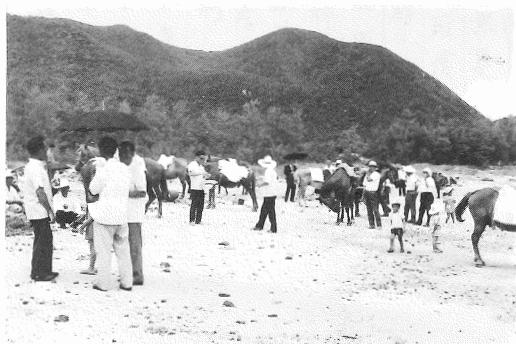
⑫ 同 前



⑬ 海岸で下馬し、神送りをする場所へ行く神女の一行



⑭ ナートンチビ（地名）の拝所の前の岩に立ち、神を送り、「唐船ドーイ」の歌をうたう



⑮ 神女が神送り行事をする間、砂浜で待つ男たち



⑯ 門中の宗家に氏子が集まり、神女から盃をいただく



⑰ 午後再び田名屋へ集まり、「テルコグチ」を歌い、首尾の祝いをする



⑱ 同 前